

## 「三つの自由」

野村 博

### 〔1〕はじめに

今世紀のイギリスにおいて最も精彩を放ってきたオックスフォード大学の政治哲学者、アイザイア・バーリン（Isaiah Berlin, 1909–1997）は、フェビアン協会（Fabian Society）の議長の職も務めた著名な経済学者である G. D. H. コール（George Douglas Howard Cole, 1889–1959）の後任として、「社会・政治理論講座」の主任教授に選出されたが、その際に「二つの自由概念」（Two Concepts of Liberty）という、非常に大きな反響を学界・思想界に呼んで、その後、「自由」について人々が論じる場合には必ず言及すると言っても差し支えないほど有名になった「就任講義」（Inaugural Lecture）を行なった。

このバーリンの就任講義「二つの自由概念」が行なわれたのが1958年、それから三十九年経った今年（1997年）の今日、私は「最終講義」（Final Lecture）のテーマを「三つの自由」とした。これは、何も奇を衒うつもりでもなければ、また、バーリンをただ単に批判するつもりでもない。強いて言えば、バーリンを初めとして、従来しばしば行なわれて来た「二つの自由概念」に、「今一つの自由概念」・・・それは必ずしも、取り立てて、「新しい」とは決して言えない自由概念・・・を付け加えたい、否、是非とも付け加えるべきである、と考えたからに他ならない。詳しくは、本論を読み進むにつれて、徐々に明らかになっていくものと思う。

## 〔2〕「自由」の概念規定（定義）

さて、「自由」という言葉ほど、人々が称賛と憧憬の念をもって口にする言葉は、他に少ないのではないだろうか？ しかし、それと同時に、これほど曖昧で多義的な言葉もまた、少ないのではないかと思われる。いったい、「自由」とは何なのであろうか？

実は、少々古い話になるが、所謂バブル経済が花盛りの頃、当時、私が出講していた京都市内の某大学で（これは断じて本学のことでない！）、「現代日本の社会と自由」について学生諸君に考えていることを文字どおり〈自由に〉書いてもらったところ、「自由はちょうど空気みたいなもの、空気がある限り空気を意識しないのと同様に、今の日本には自由が存在するから、改まって自由について考えたことはないし、また、考える必要もない。」という、極めて簡にして要を得た三行半（みくだりはん [妻に与える離縁状]）のような答案——実は私に対する絶縁状——を頂戴して、ただただ感心（いや、寒心）させられたことがあった。レジャーランドとかプレーランドとか揶揄されてきた今日の大学のことだから、こんな学生諸君がいても、別に不思議に思う必要はないのかも知れない。しかし少なくとも、本論の読者のなかには、そのような寒心にたえない人々がいないことを確信している。

しかし、それはともかくとして、「自由」とは、そもそも一体、何なのだろうか？

確かに「自由」という言葉は、極めて多義的な概念である。哲学的な定義の恣意的とさえ思われるほどの多様性については言うまでもなく、さらに政治的・社会的な意味においてさえ、従来から必ずしも一義的な記述の意味をもってはいなかった。それどころか、記述の意味の点からも、使用される文脈に応じて変化していく多様性をもった言語として、例えば M. クランストン（Maurice Cranston）が、*Freedom... A New Analysis*, 1967（小松茂夫訳『自由・・・哲学的分析・・・』岩波新書, P.16）において指摘しているように、極めて強い称賛的な情動の意味を有する「歓喜語」（hurrah-words）であり、価値を表わす「価値語」であるとさえ言えるのである。

したがって、「自由」という語は、ある特定の文脈から切り離されたならば、指示している内容や担っている意味を正確に理解することができないのである。実際、「自由」という語は、根本的に異なった・さまざまな文脈で使用されるから、まさに「人を当惑させる奇妙な概念」であると言う他はないのである。

元来、ギリシアで出現した「自由」という観念は、「他人による強制から免れること」という意味の政治的・社会的概念であったが、その後、ストア哲学やキリスト教などにより、「情念からの解放」とか「意志の自律」とかいう内面的・精神的な意味で、一種のメタファー（比喩）をもって使用されるようになった。そのためにも、一層、「人を当惑させる奇妙な概念」になってしまったと言えるのである。

だが、しかし、いかに多義的であり、「人を当惑させる奇妙な概念」であるにしても、取り敢えず、「自由」という言葉によって基本的に意味されている事態は、バーリンの口ぶりを借用すれば、人が自己の意志や行動に対して、他者による何らかの拘束・強制・干渉・障害などの「束縛のない状態」を言うとともに、更にまた、人が意志・行動の決定に際して、自己自身が「主人公（統制者）である状態」を言うことも明らかである。

そして、前者の「束縛のない状態」を意味する「自由」は、また、「障害の欠如としての自由」とか「～からの自由」とか称され、一般に「消極的自由」（Liberty）のネーミングが与えられ、後者の「主人公である状態」を言う「自由」は、人が自己の意志や行動を自発的・積極的に自己決定するという意味において、「～する自由」とか「～への自由」とか言われ、一般に「積極的自由」（Freedom）と呼ばれていることは、広く知られているところである。

つまり、「自由」という言葉は、それによって、「消極的自由」と「積極的自由」という二つの意味で使用されているのである。そして、自由概念のこの二つの〈相違〉については、従来からもいろいろと論じられてきたが、両者の〈関連性〉については、あまり詮索されてはいない。しかし、自由概念について今まで行なわれてきた多種多様な定義をとおして見ると、両者の関連性については、大別して二つの見解が成り立つように思われる。

一つは、M. クランストンが論理的な観点から指摘しているように、「積極的な意味の自由」「何かをする自由」（何かへの自由）は、「消極的な意味の自

由」「何かからの自由」とは、一見すれば異なるように見えるが、「何かをする自由」は、その「何か」をするために「障害・束縛がない」ということ、つまり、「何かからの自由」＝「(障害の欠如)としての自由」を必要とするから、結局は、積極的自由は消極的自由に還元することができる、という見解である。

これに対して今一つの見解は、バーリンが歴史的な観点から主張しているように、「消極的自由(「何かからの自由」)」に対する願望は、必ずしも「積極的自由(「何かをする自由」)」を含意していないし、それどころか、むしろ積極的自由は、消極的自由の結果として論理的に生じる自然の道理であるどころか、その実現のためには非常に特別な諸条件を必要とする理念である、という見解である。例えば、「学問をする自由」は、「学問をするために障害になるもの(例えば、国家権力による干渉や支配など)がない」という消極的自由を必要とするけれども、しかし逆に、「国家権力による支配・干渉がない」という消極的自由は、必ずしも「学問をする自由」という積極的自由を含意する、あるいは、行使するとは限らないのである。

以上、やや込み入ったように見える二つの見解であるが、これらについて、そのいずれが一層適切であるかという妥当性を問うよりも、私は、むしろ、次のような諸点こそ至極重要な問題だと考えるのである。

第一点は、「私は自由である」という時、「何から自由である」のか、その「何か」が明確でなければ、「自由」の意味する内実は、全く不明瞭であり、曖昧な概念となる。しかし現実には、この自由概念の曖昧で不明瞭のままに、例えば、「自由のために!」とか「自由を獲得するために!」とか、あるいは、「自由な世界を実現するために!」とかいうようなスローガンとして、まったく相反するイデオロギーの政党間を初め、個人の日常的な社会生活の諸相においても、情動的に、さらには闘争的にさえ、意識的にせよ無意識的にせよ、しばしば使用されている、という事実である。人々を魅了する自由という言葉が、実は同時に人々を困惑させるのも、ここに一つの原因があると思われるのである。

第二点は、消極的な自由は、必ずしも積極的な自由を含意していないということに関して、極めて重要な問題がある。それは、例えば、「障害がない」という意味で不自由ではない健康(自由)な人＝(健常者)が、すべて自由(積

極的な意味での自由)を享受して自律的に自発的に生きているとは、必ずしも言えないのではないか。世間には、障害があっても自由な人もあれば、障害がなくても不自由な人があるのではないか。「自由な障害者と不自由な健常者」——これは、一見、アイロニーに思われるかも知れないが、正真正銘のパラドクスではないか。そして、ここに、言わば、「自由の陥穽＝落とし穴」がある、と私は考えるのである。「小人閑居して不善をなす」という名言も、このコンテキストで考えてみると、よく理解できるように思われるのである。

経済の高度成長を達成した現代の日本は、物質的には何一つ不自由のない所謂「豊かな社会」であるが、かつてアメリカの社会学者R.N.ベラーが来日した際に、戦後日本の驚異的な経済発展に感心する一方で、日本の経済成長が第三世界への圧迫、自然環境の破壊、天然資源の枯渇とともに、日本人の精神の荒廃をもたらして「満ち足りて魂は空っぽ！」(Full Stomach, Empty Soul!)にしたと、厳しい警告を発したが、そしてまた、その後、心ある多くの人々が異口同音に指摘して慨嘆してきているように、物は豊かで人の心は貧しくなってきたと感じないわけにはいかない昨今である。「豊かな社会」に見られる何か大きな歪み、目に余る矛盾、苛立たしい葛藤は、「何かからの自由」の「何か」が明確にされない自由(消極的自由)(リバティ)が巷に氾濫している一方で、「何かをする自由」の「何か」が全く志向されていない傾向や風潮が著しいことに、起因しているのではないだろうか? 「豊かな社会」は、フリーダム(積極的自由)——実は、これこそ、人間にとっての「生き甲斐」・「生きる価値」、あるいは、所謂「幸福」に他ならない、とさえ私は思うのだが、——の喪失を代償として実現されたように思われるのである。

すでに『自由からの逃走』(*Escape from Freedom*, 1941)というショッキングな書名の著書を出版して、一躍、世界的に有名になったエーリッヒ・フロム(Erich Fromm, 1900-1980)は、この本のなかで、近代の人間は、個人に安定を与えると同時に個人を束縛していた前個人主義的・中世封建社会の絆からは自由になったが、個人的自我の実現、つまり個人の知的・感情的・感覚的な諸能力の表現という意味での積極的な自由は、いまだ獲得していないばかりか、かえって逆に、個人を孤独・不安・無力に陥れた「自由の重荷」から逃れようとして、別個の新しい依存・従属を求めている、と述べて、ファシスト国

家に起こった指導者への隷属や、民主主義国家に現に支配的に見られる強制的画一化という、「自由からの逃避」の過程を心理的かつ歴史的に詳しく分析している。

まさしく、「金満国家＝日本」と言われ、「豊かな社会」と言われてきた昨今の日本社会も、かなりの消極的自由を享受しながら、積極的自由の実現へと進みえないで喘いでいる。つまり、現代日本社会の異常性（もっと言えば）狂気性、その根源は、フロムの言う「消極的自由と積極的自由のズレ」にある、と言えるのではないかと思うのである。丸山真男氏の表現を借れば、「拘束の欠如としての感性的自由」が「自己決定としての理性的自由」に転化しえないで苦悶している、と言うこともできるだろう。

（しかし、「冷めた眼」から見れば、消極的自由と積極的自由のズレこそ、そもそも、「大衆社会」、あるいは「社会の大衆性」の本質的な特徴である、と断定できるかも知れないが、今は、この問題については、これ以上、触れないことにする。）

### 〔3〕「三つの自由」

さて、以上、「自由」の概念規定（定義）と「二つの自由」について、私なりの意見を織り混ぜながら述べてきたのであるが、この辺で本題の「三つの自由」に移りたい。

今まで述べてきた (1) 消極的自由（～からの自由。束縛の欠如）、「拘束の欠如としての感性的自由」(Liberty) と、(2) 積極的自由（～への自由。～する自由）、「自己決定としての理性的自由」(Freedom) は、その概念規定（定義）・意味・用法、および両者の関連性が、たとえ、どうあるにしても、その「自由」は、所詮、「自ら（自己）に因由・由来する自由」＝〈「自己」に由る自由〉として「自己肯定的・有我的自由」であると言うことができる。さらには、「人間的自由」と言っても差し支えないだろう。

しかし「自由」は、同時にまた、「自ずから（自然）に因由・由来する自由」＝〈「自然」に由る自由〉が考えられる。この「自然的自由」とも言える自由は、「自己否定的・無我的自由」と称することができるだろう。

ところで、「自由」概念と同様に、この「自然」という概念もまた、極めて多義的であり、したがって曖昧な言葉であると言えるだろう。しかし、「自然」の語義を整理してみると、一応、次のような分類が可能であるように思われる。

(1) 「全宇宙的自然」：大自然，宇宙全体，森羅万象。

〈宇宙〉＝〈cosmos〉（〈chaos〉に対する）

(2) 「非人間的的自然」：人間的・社会的・文化的でない、あるいは人為的・人工的でない自然。（自然≠文化・社会）

(3) 「原初的・先天的自然」：後天的でない自然。

（生得性・先天性）

(4) 「理想的自然」：（現に存在していないが存在すべき理想・価値）。

（当為・Sollen）（Sein に対する）

例えば、実定法に対する自然法。既得権に対する自然権。

この四つのうち、(1)(2)(3)の「自然」は、「事実」（Fact）としての「自然」であり、(4)の「自然」は、「理想」・「価値」（Value）としての「自然」である。

さて、では「自然的自由」＝〈「自然」に由る自由〉の「自然」とは、(1)～(4)のうち、いずれの「自然」を言うのであろうか？ 今の私には、残念ながら、また恥ずかしいことながら、これに対して明確な解答を即座にズバリ与えるだけの能力はない。ただ、先哲の次のような言葉を想起するだけである。

親鸞上人：「自然法爾」（念仏＝南無阿弥陀仏）〈他力〉

良寛禅師：「騰騰任運」

道元禅師：「身心脱落」（本来の面目＝尽一切自己・仏性），只管打坐＝〈自力〉

夏目漱石：「則天去私」

Schopenhauer: "A man can surely do what he wills to do, but he cannot determine what he wills."（自由＝可能性・未来志向性）＋（偶然性／必然性）

しかし、「自然的自由」が、絶対的な至上命令としての Postulate（仮定・先決条件・要請）であるということには間違いがない、と私は考えるのである。ここで私は、「良寛禅師における自由」について、簡単に触れてみたいと思う。

良寛と言えば、雪深い越後の国の国上山の五合庵で世俗を逃れ、時には童たちと手鞠について無邪気に遊びながら、隠遁の清貧生活を穏やかに生きた「道徳の華」というイメージが浮かぶかも知れないが、——そして事実、無数に出版されている良寛伝のほとんどはそのような良寛像を描いているが、——しかし実は、日に夜を自然と社会と、そして自分自身と、厳しく激しく闘い、孤独にして孤高の生涯を生きることに於いて、「自己実現の自由」を成就しようとした驚くべき「自然的自由」の人だったと、私は考えている。

（詳細は拙稿「良寛における自由」（『佛教大学・社会学部論集・第30号』1997年3月 所収）を御覧いただければ、至極、幸甚である。）

良寛は、父親との葛藤や、出生にまつわる精神的抑圧など、諸々の束縛から自己を解放するために、生家から「出奔」し、やがてまた、人々が功名と利害に明け暮れて生きている俗世間に嫌悪感と違和感を抱いて超俗の寺院へと「出家」したが、この出奔も出家もともに、良寛が自ら納得して安穩に暮らすために、自己にとって「束縛のない状態」＝「自由」を念願して、所与の現実から逃避した行動に他ならなかったのである。そして、諸国行脚の後、今度は、脱俗・超俗の宗門寺院からも、その墮落と退廃ぶりに憤懣やるかたない思いを抱いて離脱する、言わば、〈出家から出家する〉という二重の出家を断行して、生涯、住職に納まることはなかったのである。これもまた、良寛が「束縛のない状態」としての「自由」を求めた行動に他ならなかったのである。

「非俗・非沙門」と自ら称する良寛は、このようにして、世俗の束縛からも宗門の拘束からも一切解放されて、非僧・非俗の日々を生きていくことになる。そこに繰り広げられた人生は、しかし、食なくしては生きることのできない人間としての良寛の一衣一鉢、乞食行脚、托鉢の日々である。それは、仏法や戒律を守って、「難行苦行する捨身求道の修行」の営みであると言うよりも、むしろ「与えられ生かされて在る自己の命を天然自然に放下して生きる」日々・夜毎であった。何物にも何事にも執着することがない無一物の暮らし——ここに初めて、良寛の騰騰任運、優游自適の暮らしが出現したのである。

つまり、自己を否定し滅却し一切の計らいを捨てて、無我的・没我的な位置・姿勢に自己を置いたことによって初めて、「自由」は実現されることを示唆している。すなわち、人が自己を天然自然に放下した時、（一切の自己執着から



解放された時)、その時に初めて自由の実現は可能になるのである。出家を出家した非僧・非俗の良寛は、したがって、この意味において、自己を天然自然に放下した「自由人」に他ならなかったのである。

「自ら(自分から)」生きるのではなく、「自ずから(自然に)」生きる良寛は、彼自身の言葉で言えば、一頭の「驚駘」(のんびりした、のろい馬)であり、身を捨て世を捨てて生きる「問者」(閑道人)であり、「窮乞児」(乞食坊主)であり、「痴僧」であり、「風顛」(風狂の人)である。

それでは、非僧・非俗の良寛は、托鉢・乞食によって命を維持する「風狂の人」として生きることにおいて、「自由」を十分に実現したのであろうか？

私たちが、それによって良寛を知り語ることができるところの、見事な筆の跡で今日まで残されている、その数が四百五十首にも近い漢詩、それに千三百五十首にも及ぶ短歌・長歌は、良寛にとって一体何だったのだろうか？ 私は、そこに良寛が「自ずから然らしめられて」生きる日々の暮らしのなかで詩歌の創作および、その墨書において、自己を表現する積極的な「自由」を見出すのである。

かつて、「理性は情念の奴隷に過ぎない」というデイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-1776)の人間本性論に共感した今世紀最大の思想家の一人バートランド・ラッセル(Bertrand Russell, 1872-1970)は、人を行動へと駆り立てる原動力としての衝動を、他人と競合する「物質的財」を獲得・保有する「所有的衝動」と、他人を排除することにはならない「精神的財」を生み出す「創造的衝動」に分けて、善い人生・幸福な人生とは創造的な活動力のある生活である、と主張したが、まさしく良寛の人生は、乞食しながら精神的財を生み出す生活に他ならなかったと言えるのではないか。

俗悪の人間社会(世俗と宗門)から解放され天然自然に抱かれて、風狂の人として無我的・没我的に生きることによって「自由」になった良寛は、さらに作詩・作歌、墨書という人間に特有の創造的な営みにおいて、精神的な財を生み出す積極的な「自由」を清々しく爽やかに生きたのである。ここに私は、二重の意味において「良寛における自由」を見出すのである。

そして、本論の初めにおいて、「二つの自由概念」に「今一つの自由概念」を付け加えたい、否、付け加えるべきである、と私が述べた意図も、実は、こ

こにあったのであるが、「三つの自由」とは、つまるところ、政治的・社会的な「二つの自由」に、次元を異にする宗教的とも言うべき「自由」を付け加えたのではないかと指摘されれば、私には、それを否定する気持ちは毛頭ない。しかし、大切なことは、人が生きるうえにおいて重要な「自由」ということについて、考えてみるということである、と思うだけである。

最後に、良寛の素晴らしい短歌を三首だけ御紹介して、拙論を終えることにする。

- ・淡雪の 中に建ちたる 三千大千世界 [みちおほち] またその中に  
泡雪ぞ降る
- ・濁る世を 澄めともいはず わがなりに 澄まして見する 谷川の水
- ・我ありと 頼む人こそ はかなけれ 夢のうき世に まぼろしの身を

※ 本稿は、野村博先生退官記念の最終講義（1997年1月16日）の講義ノートに加筆・修正していただいて特別に寄稿していただいたものです。

（のむらひろし 佛教大学社会学部社会学科教授）